

軍備に急々たるは何の爲ぞ、歐洲列強口に仁義をこへて心に併呑を懷けばあり、社會主義者の軍備全廢論又いはれなきにあらず。

舞鶴に近くして舞鶴要塞築城司令部及同衛戍病院あり吾等は時間の都合に依り之を見ずして相生小橋及相生橋を渡りて又西舞鶴に歸り再び内藤方に宿りぬ、時に午後四時半、足のつかれしまゝに夕食して床につきぬ。さても過ぎにし三日は無事ありしが明日の空もやう何と無く怪しければ各々をあんじつ夢路をたどりぬ。

第四日 (七日)

旅館の燈幽にして鶏鳴曉を警むる頃、時は是れ卯の刻、我が一行は舞鶴を發す、雲山十里を隔て、目指すは遠き福知山、況や疎雨斜々旅魂を難ましむ。さはれ困苦は我等の期する所、雨降らば降れ、劍峯峽路、横らば横れ、未だ踏まざるの地如何なる趣味が秘むらむ、いでや、進めと勇を鼓してぞ進むある。市を縦貫すれば右手は碧灣渺々として、青島白帆を望み、左傍は絶岳斷崖峙ちて紅葉の錦を纏ふ。いつしか路は山谷の間を切りゆきぬ、いまだ秋は残りて戸々の籬に黃菊白菊を咲き亂れてあはれ深し、かくて白雲を迎へて白雲を出づれば、折から長江十里に流れて板橋を架す、欄に凭り佇望少時吟思に堪へず、

蛇行斗折路程長。停杖江橋楓樹塘。指點征帆何處去。青山白水一茫々。

青山を穿ち碧水の潺湲に沿ひ、猶進むこと幾里、漸く脚倦を催して長大息する折しも、過ぎかはす牧人が牛この牛は歩遅けれども歩みて怠らざればこそ、終には其目的地に達すあれ、歩を續けよと里又里やがて福知山は見えそめぬ、日已に午を過ぎ雨猶松並樹に注ぐ、此夜こゝに旅の宿かる。

第五日 (八日)

午前五時下女のせきたつるにより夢より醒めて旅装をさぐのへ、朝食を終りて福知山停車場に至りぬ。満天の星影は尙鮮明に輝きて、寂寥たる市街を照し、蕭颯たる曉風は嚴霜の氣を帶びて征衣頗る冷あり。

停車場に至れば瀛車は黒煙をはいて今將に出發せんとす、機を逸せず瞬く隙に乗り込みて、息つきもあへぬ間に早や車輪は廻轉し初めぬ。竹田、市島峠の諸驛を過ぎて石生に至りし頃は日東天に上り、夜の帷は開かれて、何處にやあらむ鶏聲の聞ゆ。

車輪はいよゝ進みて、柏原、谷川に至りぬ。車窓の外を望めば、四方の象山は笋籜の如く峻として高く聳え、鐵路の通ずる所は青壁千仞に削成せるが如く、目の及ぶ所は皆山にて、前面にあるものは隧道によりて通ず。かく山間を通ずる間に隧道を通ずること前後五回ありき。

一谿川の鐵路にそへるあり。急流とありては水岩に激して白沫を飛ばし、水潭とありては青壁をこらし、馮夷の幽宮もかくやと思はる。

午前八時過ぐる頃、瀛車は三田に着きたり。一行は此所に下車し、此れより徒歩神戸に向はんとて路を南にとりぬ。

昨日の雨に困じはてたる一行は今日の天氣よきに喜び勇みて、「四百餘洲を……」と高らかに歌ひつゝ、黄金色の波立てる田園の間を進み行くに、路傍の標柱に記して曰く「神戸元標六里半」と、一同は早や二里も来りしかと驚きつゝ、益々勇を鼓して進みしに、路は爪先上りとあれる坂路にかゝりぬ。朝、三田を出でしより少しも休まざるにより、少し足休めし、且つは時、午に近ければ中食せむとて、路傍の一茶店に息ひ、お定まりの梅干入りの握飯を食へり。老翁は葡萄酒の如き澁茶を汲み出で、問ひて曰く「あなた方は兵隊さんぞすか、生徒さんぞすか」と。田舎人の質朴ある此くの如く、實に愛すべし。

此所に脚胖の紐をしめて、再び出立し、坂を上りつ下りつ行く程に、余り大からざる河の路にそひて流る

あり、水清く、流れ急なり。土人に問へば此れ湊川の上流なり。建武の昔を思ひ起して、「湊川原の夕景色……」及び歌ひつゝ進むに、午後四時と云ふに、車聲喧々、紅塵萬丈の神戸市に入れり。此れより多聞町、丸徳と云ぬに草鞋を解き、夕食の後、思ひくゝに市街を歩せり。

第六日 (九日)

昨は險山峽水を跋涉し、今日しも攝播の海岸づたひ、輕々青松白砂を辿らんとす、あはれ旅の途、景色の新陳代謝するこそ面白けれ。

朝に汽車神戸を出づ一瀉千里の勢只青葉の末波の色を眺むるのみにして、名だる天下の勝光を、先づは瞬間の間に消えも果して明石に着きぬ。明石城突兀翠微の間に隠せり。

いざさらば長汀曲浦の旅路よかゝらむとて、明石浦わに出づ、沙頭に立ち見渡せば、碧浪渺渺望盡きず、淡路島近く横はり、白屋翠樹手に取る如く、西の方一に杳として小豆嶋影こそ見えわかね、壇の浦さては屋島か古戦場の名殘空しく雲に弔ふのみ。數多通ふ往來の船、あるは白帆遠く島隠れ走せ、あるは近く松外に沿ひ行くかどあか／＼筆に及びがたし。

かくて徐に軟沙を辿り行く中に淡路嶋遠ざかりゆきてやがてかゝるは舞子が濱、松巽に奇して、波に臥すらむ亭榭憩ふべし、若し今宵此に月の宿かりて、玉欄湘簾をかひあげ、明光清影を弄びあは、如何ばかりの心ゆくわざあるらむよ。

白砂一路青松を迎へて青松に入り、垂水しほあどもいつしか過ぎこして今は須磨浦に入る、左傍懸崖、樹々蒼々須磨寺はいづこあるらむ、折からとある路傍の舊墳、苔むすいし文よめば、これやこれ、あはれも深きかの無官太夫敦盛ぎみの御魂のやすらひ所とや、荒草黄ばみ、虫聲哀む、誰か往事にさかのぼり斷腸の感

あきものやはある。

あゝ思へば昔より、こゝ攝播の海岸一帯青松白、波清く月明に、まことに天下の絶光、詩歌の源泉と謂つべし、深帳の裏におはしますてふ月卿雲客多く吟腸を此に養ひ、想を此に寄せ給ひしも宜かりや。

かくて須磨より汽車に乗り、神戸に歸る。

此に於て、我等一行は、布引の瀑尋ねたりけむ四年級生徒と共に汽車を與にし、四時過神戸驛を發す、かくて彦根に歸りぬ、あゝたのしき旅ありしよ。

(完)

修學旅行記 (四年級)

理事

金石をも熔かすてふ、三伏の夏も、何時しか過ぎ去り、翠綠漸く錦を染むる秋となりぬれば、日頃、待ちに待ちたる修學旅行も愈々定まりぬ、目指す處は金比羅地方、兼ては中國をも跋涉せむと、勇みに勇みて、出で立ちし同勢は、健兒五十九名、時は維れ霜月初の五日あり。

第一日 (晴) 木曜日

點々たる星は、銀砂の碧盤に布けるが如く、未だその光りを收めず、秋風颯々として旅衣を拂ひ、遙に金龜の城頭は曉雲霞鍵の間に隱顯し、恰も浮樓の如く、飛雁高く南指するを見る、濃霧を排して馳せ參する面々三々五々、孰れも怡々として喜色面に溢れ、互に多望ある遠征を想像しつゝ、談笑せる聲、自から和氣洋洋たるを覺えぬ。

待つ間程かく七時にかりぬれば、一同運動場に整列し、校長より訓示あり、『學生の本分を忘れてはありませぬぞ』『本校生徒の對面を汚す様をこと決してありませぬぞ』と恰も慈母の愛兒を戒るが如く、最も懇切な

る訓誡を受け、小出、杉浦、堀、三先生の監督の下に停車場へと校門を出で立ちぬ。

時に曉霧、全く晴れ、旭日已に三竿、一天恰も拭ふが如し、八時十七分、一行を乗せたる列車は、長嘯一聲、金龜城を後ろにして進行を始めぬ、車中を見渡せば、角帯、前垂の商人スタイル、八字鬚鬚として一車中を我物顔ある紳士連、シガーの煙顔もふすぶる計りに得々然たるハイカラ先生、其他老人あり、小兒あり、妻君あり、下婢あり、右向左顧、語り且つ笑ひ、囂然として群雀のそれにも似たり、西窓に寄りて、遙かに湖上を眺むれば、一碧万頃、來往の白帆点々、影を水底に沈め、湖西の連岳、湖邊に迫り、山紫水明、風致絶佳、車中の旅客をして嘆賞措く能はざらしむ。

汽車は已に河瀬、能登川、八幡の諸驛を過ぐ、山岳動き、田野走り、村落退き、森林來る、往一來、應接に遑あらず、乳母が餅の聲、高きは草津あるか？勢田の勝地も只車窓に顯れしのみ、此邊琵琶湖迫りて數町とあり、對岸の山岳手に取る如く呼べば答へむ計りあり、九時四十七分汽車は馬場につきぬ、停車すること四分進行は再び繼續されぬ、忽ちにして、暗々たる逢坂山墜道を過ぎ、大谷、山科、稻荷の諸驛を経て京都驛も已に影を止めざるの時、偶々中食の命は傳はりぬ、吟詩の聲、唱歌の聲、一時にばつたり止み、只竹皮の音のみ高し、握り飯を片手に眼は窓外の美を賞しつゝかじるあり、雙眼を黑白に變じて、天井を見詰むるは、飯の食道に塞がりしにや、梅干の味、山海の珍味に優ると叫ぶあり、同感と應ずるあり、其狀、傍人をして思はず抱腹絶倒せしめぬ、吹田驛を過ぐる頃、首を窓外に旋らして、遙に前方を視れば煤烟空に漲り、高塔天を突き、笛聲は群牛の吼ゆるかど怪しまる、是れぞ、日本第一の商工業地たる大阪市の外觀とす、盛ある哉。

十一時五十分汽車は梅田驛に着けり、宏大の結構吾人をして、先づ、一驚を喫せしむ、一行、停車場前に整列し、田中靖次君より寄贈せられたる菓子配與せらる、同氏の好意は生等の深く謝する所あり、解列の後繁華難沓せる市中を右に折れ、左に曲り、安治河口に到れり、時に零時を過ぐる五十分あり、一行を載すべき利根川丸(噸數六五〇)は三時四十分解纜の筈あれば、未だ數時を餘せり、即ち解散を命せられ一同商船會社休憩所に入れり。

時至れば、一行を載せたる船は汽笛一叫、徐々に白波を蹴て橋竿林立の間を曲折迂回して河口に向へり、一行は三等過半の室を占領し本營茲に定りぬ。

室内、陋儀、陰鬱、四圍の圓窓直徑尺に満たず、梁又高からず、起てば即ち頭額を打ち、座せば即ち足を窮す、生溫き風充滿して不快云ふ可からず、蠶柵と叫びしも當を得たりと云ふべし、不平の聲四隅に起りて止まず、身は奈落の底に沈みし心地し、佛者の所謂三塗の河邊も想像せられ、牛頭馬頭の姿、朦朧として、眼前に迷へるが如し、胸塞がり、氣絶えむとするまゝ、甲板に飛び上り、娑婆の空氣を呼吸すれば不快の念忽ちに消え去り、壯絶―快絶―恰も夢の醒めたる如し、雙眼を放て回顧すれば、船は早や、正に河口を出でむとす、右方を臨めば武庫の山岳連綿として横り、薄黒の如き其上を包めり、左手は即ち大阪築港、宏壯無類の大工事、土功今や完成せむとす、遙に前方を視れば渺茫たる茅海際涯を認めず、出入の船舶織るが如く、真帆、片帆点々として白鷗の水面に舞ふが如し、和田岬遠く水天の間に斗出し模糊たる淡路島、夢より淡く前方を遮れり、其山水配置の巧、實に之れ一幅の好活畫！船將に神戸に着かむとる頃、日は已に西海に沈まむとし、夕映海波を染めて紅あり、須臾にして橙色、桃色、蒲紫と次第々々に變じて、遂に浪間に影を沈めぬ、折しも船は神戸に着し、舷に依りて遙に對岸を見渡せば輝々たる電光群星の如く燦然たり、大小の漁船其數を知らず、其壯觀筆す可からず。

船の泊すること二時間、再び航路を播州灘に取り、高松に向へり、今宵は恰も陰曆九月、十六夜の月は東嶺

に顯はれ、衆星を壓して千里同色、蒼然として海底又一痕の月を刻も、顧みれば武庫の連岳は、朦然として黛の如く、一抹の白雲中腹に懸るを見る、漸く冷氣を覺ゆるまゝ、梯子を傳ひて、客室に返れば、ああ、おかしや、今迄不平を洩らして叫び合ひし蠶棚、今は蠶のそれにも似て、足の踏場もあらばこそ、外套枕に打ち轉がり、吟詩をやるあれば、軍歌を唱ふあり、夜食の折り詰めに空腹を肥すあり、鼾聲高く華胥の巷に彷徨ふあり、されども暫時の間のみ、更け行く儘に満室寂として鼾聲のみ高し、折から一水夫の來るあり、明石海峡は過ぎしにやと問ふに、未だし、されど最早數刻を待たざる可しと、即ち再び甲板に上り、外套目深かに安樂椅子に寄れば海上波穩やかに月影清し、午前二時高松に着けり。

第二日 (晴) 金曜日

汽笛二三聲、船は投錨して、舷門の開かれたるに、とある舢舨に乗れば、秋の夜の星屑え渡りて、いと寒げある山の此方、多度津の町は、薄黒に一刷毛はきたらむ様にぼんやりと霞み渡りたるに、海水は飽く迄も黒く、折々は波の華の白く見ゆるに惡魔の詛ふかと怪まれて、何となく物凄かりしが、船の進行するに従ひてやがて上陸したるに、生憎十一師團の一隊、機動演習旁々當港に宿泊せるまゝ、詮方なく、外套眞深に、遂に息氣に一鞭あて、善通寺に向ひたるが、右に折れ左に曲るに道廣ければ迷ひもせず、見渡す田面には、秋風のまに／＼黄金の波よせ來るも嬉しく、折から通りかゝりたる商人体の男に、善通寺迄は如何程あるか尋ねかゝるに、遙かに黒みたる山を指して、あの山の麓に待ると云ふに、道の程から一里もあらむか、されば今一時の内にこそと、例の健脚自慢に、兎角して停車場に至る、尙發車に間もあれば直ちに善通寺に向ひぬ、寺は町を離れて山を背ひ、有名ある空海の成長せし所とて、五重の塔は、高く天を擡ふるかも怪まれ、いと古びたる大師堂藥師堂本堂等の所々に、散ばれる邊廻り四五丈もあらむかと思はる 二株の楠の昔を忍べるに、作りし罪を亡ぼさんとか、善男善女の口に祈りを捧げたるを、半ば耳にしながら踵を施すに總して此町は兵營の置かれたる故か、家並よく揃ひて市街も小奇麗ある様に覺えぬ、聞けば今日は當練兵所に於て觀兵式ありと云ふに、その儘通り過ぐるは遺憾極りあけれど、時日の許さぬまゝ琴平行列車に投じたるが、秋の野の黄金の薙敷きつめたるに、象頭山は錦の被布着て、お早うさまと云ふが如きも、知らぬ旅人への愛想あるべし、本社は山腹にあり、石階の西側には商店軒を並べて繁昌あるやうに見受けられたり、大門を入れば、両側の燈籠は雨後の筈よりも繁きに、旭社火雷社本宮等順次に參拜したるが、傍に立てる標札の、從是奥の院道と誌したるあり、何となくゆかしければ、十町余りの山坂を朝風に追はれながら上り行くに、錦の几帳に、紅葉の雨降らしたるが、神官の幣片手に白き直衣に映るいたる自づと腰のかゝみて、森々たる木立に神々しき宮居を拜しては、我知らず地に額つきぬ、折しも日の光の木の間を洩れ來りて我等を射るに、愈々信心膽に銘しぬ、下り道には本宮の横手より立ち出づれば、神苑の清く掃き清められたるに、神澄みて心地よく、輪奐の美唯莊嚴と稱するの外なし、やがて歸參の途につくに、先には氣附かざりしいと古びたる堂に、木馬の彫みあるもうれしく、大門を出づるに、彼側此側よりもの賣る聲の口やかましきに、とかく名物に甘ひ物なしと戯れつゝ、虎屋と云ふに晝餐兼帶の様ある朝餉したゝめて、時計を見れば汽車の出づべき時刻の迫りたるに、芬々として琴平を去りぬ、善通寺多度津を過ぎて丸龜にて下車も、丸龜城は市の南方小丘にあり、海面を抜くこと百五十尺、天主閣は高く雲を劈きて壁白く松黒し、丸龜の市を南に至ればひよろ／＼の松が枝の影は倒に濠に映りて眺めいとよし、天主閣は火藥庫に充てられたればとて、兵營内のみ拜觀を許され詳細に説明せられぬ、かくて將校集會所の裏合より市街に出づるに、交通の頻繁あるは、道行く人の多きによりても知らるべく、もの賣る男の何を云ふやら、とても通辨なければ言葉の通せぬに、

目をまらうして停車場に出で、高松に向ふに、かの白峯の怪しき姿したるに、露の涙か數行の紅涙と、めあへず、思ひは深き秋の衰れに、いと風情ある高松の町は見る所いごとく多きに、新港近くの田中屋でふ旅亭に投じたるも、秋の日の尙高ければ頓て一艘の大端船を備ひ來りて屋嶋山に至るに、さながら大屋の海中に浮び出したるが如きは、蓋し其名を取れる所以あらむか、十八町の嶮坂を登れば流汗瀧の如し、談古嶺より座をに昔を忍ぶに、壇の浦は碧盤に藍を漂へたるが如く、鹽田の砂黒きに相引川の白き帶引きたるが如き安徳帝の行在所は山角の海中へ突き出したる長崎と云へる岬にあり、遠くは五劍山の峯光蒼空を刺すか如く志度が浦もほの見えて、古戦場の秋は何とあう趣深きに、光風四邊に満ちて正にこれ一幅の好畫圖にあらずや、屋嶋寺には空海一夜作りの觀音堂を伏し拜み、住持に希ひて寶物を見るに、源氏の勝白旗の摸寫等何れ懷古の種あらぬはなく、石灰巖よりあれるからむか、雪の庭白きに、淡き紅葉の綾あしたる床しき極りあし、獅子の靈巖より瀬戸内海を眺めては、奇しき形したる大嶋小嶋のいくつとなく深碧に浮彫せられたるを白帆の翠螺を避けて去來する等えも言はれず、山を下れば炊煙の松か枝を縫いて夢かと許り淡きに簑笠の漁人、一竿を荷ひて霞に隱るゝ邊、岩隱に横はれる破船に、海鳥の羽はたきする海邊の景色の、一入興あるにさある州崎より船を出すに、所々の嶋影も何時とあう消え失せて、高松の港は電燈星の如くに輝き、汽笛の聲人車の響、何時しか船は港につきぬ、やがて夕餐済して市中散歩と浮れ出ると、戸毎々の燈火の光は夜光の玉をも欺むくべきに、覺えず時更けて、やがて和き蒲團に包まれぬ、

第三日 (雨) 土曜日

旅の疲れに、長き夢路よりさむれば、西も東も唯黒み渡りて細雨糸の如く降り頻り、容易には晴れそうもなき空模様、泣面にやせ我慢して、外套頭より被り、高松の市を南に向ふに、道いと廣けれども濘泥靴を没するに、とかくして栗林公園の裏門にかゝるに、竹の一村に行きてふ人の既に名畫の域に入らむとせるに、紫雲山は後へに屹ちて、白雲飛むで山腰を廻り、紅楓風に散つて杳々として流れ行く邊、汀に佇める鶴の池中の魚を覗く風情、げに延養の亭主あらねど壽命も延びそうに思はれ、まして西湖南湖芙蓉池飛來峯天女嶋鳳尾鳩等の數奇を凝らしたるたゞづまいに、松のむらしぐれたる態の興ある到底筆舌のよく盡す所にあらずやがて丸龜街道より香川縣廳の裏手に出すれば、かの有名ある玉藻城は、目前に浮び出でたる心地して、昔ふりたる堤上の松が枝の千秋の緑を含みたるもうれしく、やがて高松ホテルの前より旅亭に歸るに、尙乗船に間もあれば、悠々と難談に時更したるが、折柄遙かに汽笛二三聲聞えたるに、あわてふためきて波止場に出で、山陽連絡の汽船に乗れば、港は見るゝ後にありて、屋嶋山五劍山は既に雨霧に包まれて、船の女木男木等云ふ嶋の間をうねり行くに高松の市も何時か霞に遮られぬ、かくて豊嶋を離るゝ頃には北風俄かに荒むで物凄きに、海面は時からぬ花を咲かして、一上一下、船の動搖甚だしきまゝ嘔吐催すもの、眩暈して他客の肩によれるもの等醜体目もあてざれしが、船の兒嶋灣にかゝりて三番港に入る頃には、命拾ひに弗と胸撫でたる向もありき、是所にて岡山行の小蒸氣船に乗り替へ、朝日川を遡るに大驛小驛またよくひまに過ぎ去りて、岡山市京橋にて船を見捨てぬ、折から秋雨の漸く晴れて、雲の破目より太陽の光洩れ來るに、喜悅を漏して足早に醫學専門學校の横合より、岡山中學に至る程に、同校教諭廣田先生より特に茶菓を供せられ、其間つぶさに岡山附近の名所舊蹟を説かれたるが、其栗林公園と後樂園とを對照せられたる一節の殊に興あるまゝ、諸子は既に高松の栗林公園を見たり、而して今當後樂園を見れば、蓋し其淡泊あるに驚かるゝをらん、然れども後樂園は、四季の變化に於て遙かに彼に優り、且つ庭園の結構山水の配布の如きも、之を熟練ある園藝家の目よりする時は、決して彼に優るとも劣らざるかりと筆に記して、やがて迂路を介して後

樂園に向ひ、朝日川を渡れば、砂白く水碧きに、いかめして門構の坦々たる平庭に、松あり梅あり一帯の楓林の秋色を競ひたる邊より、天主閣に竹のあしらいたる、惟心山二色岡茂松庵等の工妙を極めたる、池の汀の苔むしたる岩の邊りより、清水の滴り落つる等幽趣極りなく、山水の位置草木の配合、實に彼の如く曲折あけれども、其間自づと妙味ありて、例へば是れは清香あること梅花の如くにして、彼は濃艶あること桃花の如く、唯感するの他あけれど、先の急がるゝまゝ、頓て割愛して先づ博物館に入りて、兼て聞きかじみの吉備團子に腹鼓打ち、岡山中學に歸れば、廣田先生一行に向ひ、當市にては色々盡力したれども、何分大演習前のことゝ兵士の多く入り込める故に宿るべき所あしと云はるゝに、詮方なくこれは明治の大御代に、尙袖ぬらす松の下露等口すさびながら、やがて夕餐したゝめて、世にもあさけある先生に導かれ、難查極りあき岡山の町を、ぐるり／＼廻りながら停車場に出づ、折よく列車の來合せたるに、厚く先生の厚意を謝して投車すれば、汽笛は夕暮の靄を破りて、見送るもの見送らるもの、果てはごんぷりと闇の大風呂敷に包まれて、後は有耶無耶の境に氣車遠慮なく進みて、陶器蠟石に名ある伊部三石等夢の内に過ぎて、優にやさしき姫路の市に着きたる頃には、午後九時過ぎかりき、かくて停車場に待ち合すこと少許、宿はつい前の菊水樓ありと云へるに、最早今宵も此迄として、やがて運び來れるせんべの様な蒲團に、難子寐の興あるを笑ひさゝめき、今回の旅も余す所僅かに二日ときけば、たゞ何となくあしくて、ひとりひざを挽て空想を故郷の空に馳するも、哀れに面白かりき

第四日 (晴) 日曜日

十一月八日、晴れ、午前第十一時二十五分の列車は、早くも吾人が、一行を載せて姫路市を辭し、明石に向はんとす、車窓より外を眺むれば、北は連山相連あり、南は海水漂渺たる涯、青松遠く連ありて、白帆去來隱見す、間もなく車は明石につきぬ、此地にて下車し、徒歩して須磨に向ふ、行程約四里あり、途中人丸神社に詣づ、社は人丸山頂にあり、山は高からずと雖も、眺望頗佳麗あり、明石城の遺蹤あり、社内に老櫻あり、記に曰く、昔盲人あり、此社に詣で、餘念なく、「はの／＼とまこと明石の神あれば我にも見せよ人丸の塚」と咏しつゝ腰折り敷きて祈りければ、不思議や雙眼忽開きぬ、其時代の盲人は、己が持ち居りし杖を此處に捨て置きてけるが、亦も不思議や、翌年より枝葉榮え、春毎に花咲きぬと、名も高き、盲杖櫻とは此樹のことあり、吾人は此記を讀んで奇怪の感に耐えず、亦赤石城主松平日向守源信が建てられたる碑あり、碑文は長ければえも記さず、かくて吾人は須磨に向ふ、路は海濱にあり、白砂青松相映じ、風色極めて佳あり、前には淡路島山手に取る如く横たはり、眞帆、片帆、島がくれ行く舟、漁る舟、宛ら一幅の活畫あり、加ふるに烟霞淡く棚引き、朦朧たる風景えも謂はれぬ詩的美景あり、吾人は一たび此景に對して去るに忍びず、ふりかへりつゝ須磨につきぬ、此處より再び列車に乗す窓より淡路島を眺むれば、島は夕日をうけて面白く色とられ、海水亦黄金を漂はす、折しも水禽高く白帆をかすめて飛ぶ、吾人はかゝる美景を見送りつゝ、島は水煙杳靄の間に没しぬ、一行神戸にて下車し、此夜橘町五丁目播磨屋に宿る。

第五日 (快晴) 月曜日

鶏鳴未だ曉を報せざるに、四室の寢所は已に囂然たり、明石の勝を賞するあり、須磨の美を歎するあり、或は同志と本日散歩を約するあり、笑ふあり、叫ぶあり、東天漸く白み咫尺を辨するに至れば洗顔所は已に人山を築けり、下婢の進む膳部膝下に至れば、手は自ら箸を握り、見る／＼中に一ダース、流石の健兒天晴々々、腹は肥えたり、辨當はよし、いでや今より神戸の勝を探らんと街路に立ちぬ、時に監督部より命あり、要に曰く、一行は四時當停車場に集合すべし、各自、自由に散歩すべしと、茲に於てか一行列を解き、

各自其欲する所に向ひぬ。先づ湊川神社に詣つ、是ぞ三尺の童子と雖も口にせる建武の忠臣楠公の廟あり、左方に建てる嗚呼忠臣楠子之墓、歴然として八字を刻せり、境内に水族館、勸工場あり、参拜する善男善女踵を絶たず、香煙縷々として千古に芳し。湊川は埋れて只其遺跡を存せるのみ、鳥居を出で、右に折れ左に曲り、電柱は林の如く、電線は蛛の巣を張りし如く、荷を負ふ人、車を引く人等雜沓に雜沓を極めたる市街を、幾度か警吏の勞を煩はし、漸く生田の社前に着きぬ、社廟莊嚴を盡し、蒼鬱たる老樹其背後を廻り、枝葉互に映掩して、吹く風の音も、神々し、是ぞ壽永の昔、梶原源太が奮闘せし處、梅花あらねど枯葉の數片、風吹かざるにひら／＼と下り、旅客をして徐懷古の念を生せしむ。鳥居を出づれば右手に神功皇后、釣竿の竹あり、右側の小札に記して曰く、神功皇后三韓御親征の當時、此の竹により、釣を垂れさせ給ひ、以て其勝敗を占卜し給へり云々と、數條の竹、綠々として昔時の影を失はず、衆默視すること久し。此處を辭し再び雜沓の巷を過ぎ、諏訪公園に向へり、幾度か曲り、幾度か折れ、小學校前に出で再び、右方に折れて進めば、爪先上りの坂路、然も狹きに非ず、車臺二輛を並ぶべし。已にして諏訪山麓に至り、羊腹たる徑路を登ること數町あらずして、一つ平坦ある地あり、方一町に過ぎず、是ぞ有名ある公園あり、崖頭に立てる、四柱堂により眺望すれば、全市は殆んど雙眼に收まり、洋々たる茅海足下に湛へり、海には數千の大小汽船出づるあり、入るあり、波止場に立てる無數の人影孰れも忙はしげにぞ見ゆる、陸には壯大の建物軒を列ねてその筆を捨てしむ、英國々旗の戸に翻り、艦艇に滿艦飾を施せるは該國の祝日あらむ。折しも遙か灣頭に横はりし、艦中より耳を劈く砲聲一發續いて又一發、九隻の艦体より出す三發の祝砲、轟々として天に響き地に轟き、山岳爲めに裂けむとし、海爲めに覆らむとす、其物凄き思はず肝を寒らしめぬ、斯くて再び

山を下り、布引の勝を探らむと、道を左手に取り行くこと一里にして達せり、茶店の間の徑路を出づれば一の石橋あり、これを渡れば即ち雄瀧に達す、まづ路を左方に取り雌瀧に向へり、清々たる碧水万丈、綏々として岩崖に懸り、曲折して岩頭を打ち、岩角に當れば必ず怒る、怒れば必ず叫號して落つ、水煙四邊に飛散して雲霧となり、碧玉碎けば痕を止めず、其絶美、賞歎すべし。再び路を返して石橋を過り、崎嶇たる徑路を登れば稍々險にして然も狹隘あり、數町にして即ち達す、茶店に憩ひて渴を醫し、欄に倚りて臨めば巨瀑の懸るを見る、鑿々として降り、白布を引ける如く銀河の中天より落つるかど怪まる、其景快絶一布引の稱其當を得たりと云ふべし。坂を下り河に沿ひ海岸に出づれば是ぞ當市唯一の市街、外國居留地あり、碧眼の紳士、辨髮の支那人、行くあり来るあり、流石東洋屈指の貿易場、豪商大賈軒を列ね、人口稠密、家屋櫛比し、貨物の輻輳行客の來往あど、旅客をして一驚を喫せしむ。已にして停車場に到れば三時を過ぐる四十分あり、一行は已に休憩所に在り、四時二十分一行は、昨夕當地に來りし五年級諸子と共に、三等四室を占領し、汽笛一聲歸路に就きぬ。

嗚呼愉快ありしこの行、壯快ありしこの行、實にや百聞は一見に如かざるの金言吾人を欺かず、互に談笑の間に汽車は已に大坂に着きぬ、停ること十有二分、再び進行を繼ぎ何時しか京都驛も過ぎ逢坂山を出づれば懐しき故郷の月は一行を迎へぬ、初夜の旅寢の梶枕、如何に樂しかりしよ！旅宿の二階に蒲團を爭ひし如何に面白かりしよ、後樂園の景、扱ては屋島の眺めあど万感交々胸中に湧き出でるを、る旅情を忍ぶ中汽車は遂に彦根に着きぬ、一行停車場前に整列し、人員點檢の後各自が宿に向ひぬ、時しも月光空碧に懸り、万籟寂として聲なく秋風面を吹て肌寒し。

(完)

高嶋紀行

雜誌部理事

白菊の花床しき香を放ち、木々の緑葉いろづき初めぬる霜月の七日、第三學年生徒以下三百名、湖のあまた高島に向ひ、藤樹書院に參拜す。

夜來の雨未だはれやらず、晏天の無情をかこちつゝ、彦根波止場を解纜し、勝野港に向ふ、時に九時半。

陰雲低うたれて回顧莫々、淡墨色の空、淡墨色の水、連山補秘のうちに潜みて、眼に入るものは、たゞ、彦根城の粉壁、磯山松の翠微のみ。

喧騒ある機關の響に鯉魚の夢を驚かしつゝ、霧の如き湖を航するに、行く手遙に、多景島うす青くあらはれけるが、近づくまゝに見塔寺の白壁みえ初めたり。

抑この島は、琵琶湖のたゞ中に屹立せるにて、周回三町、斷崖水にのぞみ、奇岩をばだてる所、翠松竹篠之をつくろひ、一僧こゝに住まへるあり。天晴れたる時、巖頭にたちて眸を放てば、東北はるかに伊吹の峰、天際を摩して此國の鎮とあり、東には鈴鹿山脈、北より西には近畿山脈、相連りて美をきそひ、容を飾る。

竹生島、白石、沖の島、相呼應じて湖上にたち、湖東の平原、湖西の平原、百里相連る所、田家の白壁樹間に隠見し、將た、寄せては返さざれ浪、脚下を洗ひ、鳧鴨水をかすめて飛ぶ。あはれ、塵世の汚念を去て羽化登仙の思あり。多景嶋とはたが名づけゝん、げに綠樹かげ沈んで、魚木にのぼる姿あり。今や汽船は美妙崇高あるこの島を後にして、白石をば右舷に眺めつゝ航せり、數仞の巨巖、五つばかり、幾千年の風雨に晒されて湖上に屹立し、鳧鴨數百、翼をそろへて休む。

かくて午前十一時といふに、目ざす勝野港に着す。茲は大溝町の一部、分部氏の舊城地にして湖西の名邑あり、大津市との間汽船常に往來し、旅客貨物の聚散や盛なりといふ、市街も家居よく整へり。

茲にて船を下り、雨を冒し泥濘をふみ、西近江路を北に向ふて發し、永田、鴨の二村をすぎて小川村に達す時正に午、行程約一里。

雨を民家に避けて晝食を喫し、順次、藤樹書院に參拜す。こはこれ中江藤樹先生が帷を下して陽明學を講せられし所、先生の篤き、天下悉く其德を慕ひ、贊をさるもの門に滿ちたりといふ、宜あり、熊澤蕃山が三日三夜頑として門前を去らざりしことや。

先生没せられてこゝに二百年、世と共に流れて、あたは、其名跡もいたく荒れすだけれども、德の燈、影漸く暗く、誰繕はむ人もなく、うたゞ行客の胸を痛めしめしことそれ幾星霜ぞや、近年有志相謀り、此名跡を永久に傳へ、先生の德を仰がしめんとして、滿天下の義捐を募り、今や小やかある假書院は營まれたるあり。

書院の一室に、中央には先生の神位を祀られ、其左右に寶物を陳列せらる、其主ある者は

一、眞筆の孝經一卷

一、致良知の眞筆及び和歌書簡、

一、孔子十哲の像及び先生の像、

一、大塩平八郎の致良知に對する跋

其他數種、隈なく拜觀したり。

先生の墓は先生の菩提寺ある玉林寺の門前にあり、石垣をめぐらして先生と母堂と夫人との墓石鼎立せり。佇立杖をとめ、感慨時を久しうして、ありし昔の俤を偲べば、有情の秋雨、蕭々として降り、微風一陣、

松の梢に颯々の聲あり。

午后一時、小川村を辞して勝野に歸り、再び汽船に乗じて、午后四時悉く彦根に着す。』

寄宿舎旅行記

秋も稍更けたり、朝露を踏みしだきて、近き山邊に菌あさりし人の影絶えて、今は唯紅葉狩に忙はしき頃とありぬ。是迄度々の日曜には或は友達の下宿を襲ひて、焼芋の一つも奢らせ雑談に一日を費すか、又は詰らぬ小説でも引出して、心と体と共に悪くする位が關の山にて久しく無聊に苦しみし舍生の、又もや来る十一月一日の日曜をいつもと同様何仕出かせしと云ふ事をくして空しく過さむはいと勿躰あし、一つ奮發して土曜の晩より、一泊行軍をやつたらば如何との案出で、一同を面白からむと直に賛成せしかば、何處此處と種々談合の末、終に名にしおふ叡山に山法師の趾を尋ぬる事に決し、其日の至るを待ち設けぬ。

十月三十一日、朝來の曇天放课后にあつても更に霽れず、今にも泣き出さむする氣色を見せしかば、一同の心配一かたあらず。かくて午后五時頃迄、徒らに空を白眼みて氣遣ひ居りしが、杉浦舎監遂に堪らなくありて小使をば測候所へ走らせたるに、霎時して驅け歸りたる返事は「西南の風雨、后晴」この事に占めたつて叫びつゝ、午后七時三食分の握飯八個を携へ、草鞋脚絆に足を包み、外套の鈕を解と懸合せて寄宿舎の門を隊伍整然練り出せしは、杉浦坂水野東島四舎監を始めとして総勢二十六名、勿論舍生は最も澤山あるのれども、野球の正副選手十名は既に去二十九日より、京都の三高へ行つて居り、脚氣其他病氣の爲め行き難きもの及歸省中のもの等ありしを以て結局人数は之だけあり。古臭い漢詩やら。新臭い軍歌やらを怒鳴りつゝ、急ぎ候程に早や波止場に着いて候。

折しも今迄耐へに耐へし雨雲はとうとう辛棒仕切れずして蕭々と降り出せり。一同は何に此位の雨はすぐ晴るゝからむと噂して折柄長濱より來りし汽船にもぐり込むや草鞋を脱ぎすて直に己が手枕に厭かくもあれば口角沫を飛ばして盛んに議論を闘はすものもありせしが、甲板は雨が降る爲め出でられず。窮屈を忍びて長命寺を過ぐれば堅田へ着くを今か／＼と時々窓より頭を延ばして眺むれど、何がさて如法暗夜の事あれば何處をそれと不知火の消えて果敢あき有様ありしが、突然牛が鳴くやうある氣笛の頭上に轟けば、吃驚しつゝも其れ來たと云ひながら、手荷物とては辨當のみあれど之忘れては怎もあらず、各々手に提げて船の止まるに等しく棧橋へ吐き出されしを一應檢して見たるに、間違ひあく二十六個の頭顱打揃ひし故、先一安心して行かむとすれば、切符受取りの奴狼狽と呼び止めつ「切符の數より澤山居あさる様ぞすかア」と抜かさに一同クワツと急ぎ立ち、「かゝんだぞ……僕等を以て船賃を胡麻化す様か方だと思つてけつかののかい、憚りながら滋賀一中……と云かけると奴さむ此見幕に怖れしと見え黙して通しければ、馬鹿を奴だかア、と罵りつゝ豫て照介ありしを以て迎ひに來て居られし同地小學校の教員様に導かれて、同校に至り草鞋足袋を脱いで一教場へ通り、ヤレ／＼と足を伸ばせしは正に夜の十二時近き頃と覺ゆ。

舎監達は別間あれば如何なる様子ありしか知るに由あし。一同の食堂兼寢室として與へられたるは、普通教室の机腰掛を隅の方に片寄せ、中央には二個の角火鉢を据えて一面に薄べりを敷きつめられたる用意の周到にアツと一同感謝し奉りて、先御持參の行厨を解きて夜食を創めしが、副食物の鹽鮭を火鉢に載せて焼くもの多く、焰煙天井をや焦すらむと夥だし。食事了れば衆皆火鉢を圍みて、雑談するあり、或は何處より探り出せしかチョークの小片をもて黒板に樂書きをなすあり(秘密々々)振舞の澁茶に舌を濕はして得意の喉を唸らすもの等ありて随分賑やかかりしが、もうそろ／＼寢やうまいかと發議するものあるに同意して、一同外

套着たる儘ゴロリと横に轉びしが、足袋は前刻濡れて脱ぎ置きたれば爪先冷えて眠られず、仕方なき故彼處此處にてヒソ／＼と私語するものゝありて容易に靜まるべくもあらざりしが、それでも一時過ぐれば矢張り眠くあると見えて一寸靜まりかけし所へ何處の惡戯者かブーと時からぬ祝砲を放ちし爲め、一同ドツと計りに吹き出せば折角寢付きし男も此物音に眼を覺まし、疳癪を起して火鉢の側に坐り込む次第、喧騒は舊に倍したる所へ舍盡も夢見らでにや、やがて出で來り、最早や三時過ぎて明るるに間もあければ、朝餉を喫して出發の準備するが宜からむこの事に、どう／＼一夜まんじりともせず明かして了つたと零しつつ、たつた今詰め込みし腹へ又もや二個の握飯を苦もあく平げて、いざ出立と御輿を擧ぐれば、小使室の柱計時は眠むさうに四時を報せり。

小使君が嚮導に提灯照らしつゝ往來へ出づれば、夜來の密雲未だ散せず。月色暗膽として曉風ヒユツと計りに頬を涼むれば、針よりも痛く、全身に粟粒を生ず。兩側ある人家まだ起き出でたるものゝなく、天地混沌として太古の如き間を、軍歌の聲に鳥の夢を破りつゝ進み行く前方稍東方に當りて、曉の明星と輝けるは思ふに馬場停車場の電燈あるべし。村の端れにて一同小使君に厚く禮を述べて別れ、覺束なき曙光をたよりに道をとめ行けば、折々泥濘の中に足踏み入れてヒヤリとするに驚く事一再ならず。然し幸にも雨は全く止みたれば有難しと急ぎ立て暗中を二里餘りも辿りし頃、道路漸く明瞭となりぬ。此に遅れたるを待合せて午前六時半東坂本日吉大社の華表前にこそは着きにけれ。

官幣大社日吉神社と記せる石標の横より爪先上りの坂道は隅から隅迄一片の落葉だにかく忠實ある宮男が手に掃き清められたるに、頃しも晩秋早曉の事あれば廣大ある境内人影なく寂寥として唯瀾氣のみ満てり。兩側の巨楓老櫻は未だ燃ゆるが如き壯觀を呈せずと雖も、青葉混りに所々薄紅葉したるは、恰も深窓に佳人が

嬌羞を含みて立てるが如く、何となく心牽かるゝ眺め也。更に進めば一步は一步より幽邃に實にや霞を吸つて颺遊せる仙客の住むべき所にやあらむと怪しまるゝ計り、御影にて造れる三個の大橋は青苔滑らかに蔽ひて、暗に其星霜の古きを誇り。溪中の清流は玉を溶かして淙々たる瀨の音に俗腸腐腦を洗はしむ。

稍上の小祠に下級生の群れ集れるを何かと思ひて見れば、神猿の額うてる仲に一個の孫悟空殿圓らるる兩眼を睜り、嘻々と呼びながら怪しげに覗く人々の顔をば凝視するありき。巨蛇の樹に纏れるが如き古藤に膽を潰しつゝ本殿の門前に恭しく拜禮し畢りて、暫し境内を散策す。大小の宮祠應接に遑なき程あるが中に石を拾ひて磨り付くれば、柱椽の嫌ひなく密着して落ちざる所ありと教ゆるものあるまゝに試れば事實あり。之は不思議と近傍を逍遙せる者共を呼び集めて頻りに石を拾ひてはくツ付け居る中、不意に本殿の方に當りて呼子笛の音しければ、勿々其處を去りて門前に集り、猶他よりも集まりたれば、茲に一同打揃ひて延暦寺へ到るべき坂道を攀ち登りしが、麓より四丁目迄は近道を採りし爲め、其急峻ある事言語に絶し、苦しさ云はむ方なし。こんな道計りから兎ても堪らぬと、早や弱い音を吐く者さへ出で來し程ありしが、其後は路幅も廣く、勾配もさまで急ならねば一丁毎に記しある小石標をたよりにえつさ／＼登る中、郵便配達のような爺が金剛杖を力に悠々と行くを呼び止めて、麓から寺迄は何の位あるのかと訊けば、噎れたる聲にて、二十五丁ありますとの答に力を得て、然らば此處からは、もう十町内外だ、案外近い哩と喜びつつ、二十丁目迄到りし所に一堂ありて天梯權現と記せり。

此處にて暫く休息しける内追々後れたるも上り來りければ、再び起つて急ぐ程に、大費と中學林と並び立てる門前へ着きしは午前八時半過ぐる時分にて、先登は二年級のものありし。即ち門内に入りて眺望すれば東江州の大小峯蠻目睫の間に迫り、琵琶湖の全景一絲をかけず、一木の障ゆるなくして我等の面前に捧げられた

り。遙かに見渡せば昨夜過ぎりし奥、沖の諸島點々青螺の如く、更に遠く々々雲烟渺々の間に浮出でたるは北隅の絶勝竹生島にあらずや。一夜樂しく談り明かせし堅田の町は炊烟今正に酣あり。右方大津の市街に屋瓦波浪の如く、青疊あせる水面には帆船汽船の歩み、蝸牛に似たり。

何時迄經ても眺め厭かぬ景色を促されて立去り、元來し道の右側ある數十の礎礎を拾ひて昇れば、壯麗ある樓門ありて文珠樓とぞ記されける。其中間を通りて石段を下れば右手に方りて矢來作れる樹木あり、名けて檀と云ふ。松に似たり、開祖傳教大師唐より歸朝の節携へられし品なりと傳ふ。前面數十間の大廻廊は紫宸殿を摸したるものある由にて、人の出入を禁せり。左方の隅より入れば根本中堂の椽に上るを得。此處に一人眉目清秀の若僧當山の縁起寫真等を賣り居たるが、一同の打揃ふを待ちて、一々説明の勞を取れり。當山は桓武天皇延暦七年傳教大師の創造にかゝれるが、其位置京都の鬼門に當れり、故に皇城唯一の鎮護として歴代朝廷の歸依淺からざりしが、元龜二年秋九月一度織田右府の爲に全山赫灰と化せり。后寛永中南海僧正東叡山と共に當山を再建せられしより、復兵燹の災あく以て今日に至れり。本堂は間口廿四間奥行十八間の巨刹にして、周圍七尺五寸の圓柱七十二本あり、一隅には一切經を積み上げ、奥には中央に藥師、左右に毘沙門、大師相并びて三堂あり、本尊は等身の藥師如來にして傳教大師の御自作とぞ聞えし。此所に於ては日々皇城鎮護の爲め眞言秘密の法を修するを以て、祭壇は椽より六尺低く造りあして、全面花剛石を以て敷詰められたり。藥師堂前の法燈は開祖創立以來未だ曾て消滅せし事なき時代附の代物なりとか、かくて彼僧は經几上ある縁起の巻物を恭しく取り上げ、拜一拜したる后徐ろに讀み出せり。音吐清朗にして或は高く或は低く堂中に響き渡りて尊き譬ふるに物なく、云ひ知らぬ森嚴の氣に打たれて、佛敎には頗る冷淡ある吾等の頭覺えず垂下せり。最後に中堂と廻廊との間ある二株の笹を指して彼亦大師唐より携へ歸られしものと説けり。

兎まれ角まれ此中堂が史學上美術上確かに一顧の價值あるの一事は疑ふべきに非ず。一同厚く彼僧に謝して出づれば、思ひ掛けなく旭光輝々として老樹の枝間を漏るゝに勇氣を増して四明嶽の絶頂を極めむと欲し、とある小店に休憩したる后、前の坂道を進む邊りには大小の堂宇屈指に堪へざる許りに并び立てれど、大講堂の中堂に似て稍小ある外は、平堂凡刹のみあれば詳しく見る遑なく、直ちに進みて、雜草人肩を没する程に生繁れる小道を攀ち初めしが、夜來の降雨に落葉濡れて迂り易く僅々十町足らずの間を半時間餘も費して漸く參謀本部の測量臺下に着きて、ホッと一息つきしは正に午前十時に垂んたるの時、前刻より腹中頗る北山の有様あれば、取不敢餘し置きたる團飯を嚙りつゝ、天慶の昔平親王將門が藤原純友と此山に登り、皇城の規模宏大あるを俯觀して、覺えず、噫壯あるかあ、男子將に斯の如くあるべしと嗟嘆せし如く、卅五萬の大都を眼下に視下さむと期せしに、無情ある哉、天は此時無縫の白衣とも云ふべき濃霧を以て、全山を包擁せしかば、兩眼あれども咫尺の外は見るに由なし。失望落膽の餘り、食事を濟ますや否や、一同無茶苦茶に道を探りて降らむとせしける折しも、倏ち沛然たる大急雨は篠を束ねて降り來れり。

あはれ泣面に峰とは今の我等が事にこそと、一同太く天の無情を恨み居る中、曩の濃霧は彌々深く閉したればさながら迷宮を辿るが如く、前后相呼應じて離ればかれにありし一同の道を誤らしめざらむと務むる仕末。五里霧中に彷徨するとは當に此の如きを謂ふかむめりかど文章の稽古もやつては居られず。迂り易き山道の中央雨に穿たれて、溝をあせる惡所を走せ下る苦しさ！草鞋は千斷れ、足袋は破れ、散々の躰にて漸く花剛石を截り出す山小屋の傍に出で、其よりは石を運搬する桶の砂道を疾驅して正午近き頃、濡鼠の如き一隊は辛ふじて修學院離宮の前にぞ着きにける。後人に聞く、此日我隊の下りしは有名なる雲母阪とて、其かみ親鸞上人が百日の間夜々延暦寺より三條の六角堂迄通はれしてふ山中第一の難所ありとぞ。

何時も間違ふを以て名高き、彦根測候所の豫報が奇妙にも今日は珍らしく的中して、一同が下山し了りし時より、さばかり吾人を苦しめし大雨霪と降り止みて、太陽は今泣いた鴉は誰だと云はぬ計りの顔して、一同を照りつけぬ。

暫時休憩の後、散亂せし一同茲に隊を組み、吉田町ある第三高にて舉行せる近府縣中學の野球試合を見むとて、勞歩を運び、零時卅分同校の門を潜れば、今將に血戰の最中と見えて、憂然たる打球の響き、審判官がストライキ、アウトの叫聲頻りに耳朶を打てば、最早矢も楯も堪らず。ドヤ／＼と侵入して、グラウンドに眼を注げば、こは如何に、確か今朝終りしあらむと想像せし我校選手が今しも三重一中と雌雄を決せる時あらむとは。思ふに今朝の降雨にて開始時刻の遅れたるものあらむ。世の中は何が幸とあるやら知れずと、ひたすら感心して見物してあれば、やがて三高の制帽つけたる一人が一同を導いて、來賓席の右側に席を與へられぬ。

我等は此町重ある待遇を謝しつつ、大人しく觀覽せしが、我校の仕合は午後二時に至りて了りを告げ、次は大垣中學對京都三中の仕合ありき。此時舍監は一同を三隊に分ち、各隊の人員は一團とありて隨意に散策を許し午後五時迄に七條停車場へ集合すべく命じ置きて、何處へか立去られたり。

我隊の人員は十一名にて最大の一隊あり。午後三時我隊は同校を辭して、大學前より鳴川の東岸に出で岸に沿ひて下る途中、食麴包を求めて飢を充たし、五月蠅く着纏ふ車夫に閉口しかがら、三條の大橋を打ち渡り新京極を通りしかど、見世物小屋に見惚れてうつかり口を開く様を田舎漢でなければ、傍見もせず一直線に突き徹けて、四條を経烏丸通にて他の一隊と合し、東本願寺前より停車場へ達せしは四時半近く、今一つの隊と舍監は未だ來らず。一同待合所のベンチに腰を据ゆれば昨夜の影響と前刻よりの疲勞とにて上下の險鬼

角親密にありたがるを無理に睨りて待ち居る中、何れも打揃ひたれば、即御定りの赤切符を求め、五時何十分かの列車に投じて大谷驛に下車し、之よりは隈あき十二夜の月光を浴びて、長影を地に印しつつ大津の波止場へ達せしに、まだ解纜はに半時間も餘せりと聽きて、一同今宵こそ昨夜の窮屈ありし腹癒せに、甲板にて千里の外迄照さむ計り訝やけき月景を賞しつつ、茶話會にても開かむものをと、そが材料たるべき柿密柑饅頭等をしてたき買入れて、八時半出帆の一氣船に乗り込みしが、之が後には累りをあして我身を苦しめむとは神から一同の識らむ筈なく、雑談を縦横笑聲船中に溢る、傍件んの兵糧をば手當り次第に貪り初めぬ。かくて船の進行するに隨ひて、四面の遠山薄墨もてぼかしたる如く、漣よする湖上に月影碎けては金龍躍る絶景に思はず快哉を呼びしが、堅田を過ぎし程より、天候ちと怪しくあり、波浪漸く高まりて船舳左右に動揺すれば、爰に一同初めて稍不安の念を懷くに至りしかど、猶大事に到らむと迄は思はず、何あに是しきの波はと高を括りて胃袋に忠義を盡し居りしが、長命寺に寄港せむとする頃には、最早餘程の荒波とあり動揺は時と共に甚だしくあり行くに早くも船量を感じて時あらぬ花を散らす者あるに至れり。

程なく汽船は奥の島に着けり。下にものはあれども、此風波を怖れて乗り込む者は更に無し。やがて汽笛の音と共に船は拔錨せり。と思ふ間もかく船舳の動揺は一層甚だしく又以前の比にあらず。時に船長來り告げて曰く「御氣の毒ですがこの様に荒れますと、彦根へは寄れまいかも知れませんが、怎らか其御積りで……」と果然引導は渡されたり。オヤ／＼と無事あるものは一同眼を見合はせしが今更如何とせむ術なく、あゝこんな事から、汽船にて歸つて了へば宜かりしものをと後悔すれども所詮追付く談しではなし、兎角する中に風伯益々怒りて小山の如き狂濤船縁に打當つてはサツと計りに水煙を飛散せしめ、長さ十間に足らぬ我汽船はあはれ秋風に飄翻する落葉の如く、或は高く九天の上に突進するかと見れば忽ち低く奈落の底へ墜

落すらむと怪しまれて物凄し。かゝる有様あれば船にはかかり強き客人も大半暈酔して、苦しみ呻吟く聲は嘔吐の臭氣と共にケビンに充滿して不快き云はむ方なく、午後十一時半長濱着の汽笛を聞きし時には、一同再生の想をかしぬ。

投錨せらるゝや、先を争ひて、船室を脱け出でし一同の顔色全く失せて、病人の如く、加ふるに月光之に映じて怖ろしき迄に蒼ざめたり。十一月二日午前十五分發の列車にて米原迄來り、乗替への下り列車を待つ中三時過ぎとあり、懐かしき我彦根停車場に下車したるは早四時に間もなき時にて、其より寄宿舎迄の間は、互に物をも云はず、舍門に入るや、酷い目に遇ふたを、いや弱つた、等と口々に漏らしたるを以ても其如何計り惱まされたるかを知るべし。

草鞋脚絆を解き捨て、豫め準備しありつる夜食を掻き込むや否や、臥床に倒れしが、時既に午前五時を報じて。東の窓はほの白く、炊事場裏に東天紅を告ぐる鶏聲勇ましく響けば、あゝもう夜が明けたと思ひ乍ら連日の疲勞に前後も知らず、夢は早やくも會遊の地を駆け廻ぐれり。(鏡鳩生)



通信

東京だより

江東生

拜啓時下嚴寒之砌に御座候處、諸君愈御健勝御勉強之程奉大賀候、降而小生以御蔭無事消光罷在候間、乍他事御安神被成下度候、扱分袂以來は意外の御無音に打過ぎ奉多謝候、殊に在學中は卒業生の冷淡を喋々しあがら、今日に至るまで前言を履行致さゞりし罪は、何とも申開き無之、慙愧之至に不堪候。

烏兔勿々小生出京致してより、彼は二星霜を経過致候、東京は學問の淵藪と申し候へ共、下愚の性は移らず、瓦石は珠玉と相成不申候、乍去一塊の鐵も時計のせんまいともある、開明の世の中に、せめて凡骨の社會の用に立つこともやと、聖賢の道に志して未だ門徑を窺はざる者に有之候、されば仰々しく東京だよりあごとく申候ひても、所詮羊頭狗肉の譬に洩

れず候へ共、僭越とは知り乍ら見聞の二三を御通知可申候。

名古屋が城でもつといへば、東京は書生でもつと申しても、敢て誇大の言には無之候、其適例は昨年初秋彼の濟成學舎が故ありて閉鎖せられしとき、本郷一部の商業界が一大恐慌を來せしにても知らる可候神田牛込より學校と下宿屋と書店とを除けば、後は殆んどゼロと相成可申候、殊に驚くは各種豫備學校の大繁昌にて、正則英語學校の門前幾千多士の出入は、新橋の雜沓も及ばぬ位に御座候、されど小生は徒に書生の多きが、邦家の慶事あるや否やを疑申候。近來學生の志望が一轉して、漸く實業方面に趨くもの多きを加へ候由、これ從來學位空名を過重せし反動とも可申、世人が一般に實力を認識するに至りし結果に有之、社會の爲め最も喜ぶべき現象に候へ共己れの特質まで打棄てゝ、流行を追ふは甚だ面白からぬ事と存候、好きこそ物の上手あれ、特質はやがて己が立身の武器と思考仕候。

客年十一月二十九日、滋賀一中卒業生の大會を上野の韻松亭に開催致し候、中村三宅松宮諸先輩を始め會する者三十餘名、懷舊談に首肯き、滑稽笑話に頗るはづし、夜の更くるを忘れて、冥々の裡に交誼を温め候、折から山上に響く時鐘は、そらに金龜城下の昔を思ひ起さしめ候。

中學を卒業して高等の學校に入學する準備をあすに都鄙何れが宜しきやとの問は、屢々承る所にして、之れに對する答も十人十説に有之候が小生は何れがよしとも不申、たゞ東京は勉強に便利すぎき程便利あれ共、耳目を遮り勉學を邪魔するものも亦多く、往々京の午睡が却て田舎の學問に若かざることあるを一言申置候、要は諸君の意志に有之候、(但し學課目の非常に後れたる場合は此限にあらず候)。

擱筆するに臨んで一言早稻田大學の近況を御報告致候決して自畫自賛の愚を學ぶ譯には候はず、聊諸君が御卒業後の御參考に資する所あらば幸甚、御承知の如く當校は明治十五年、大隈伯及海南の奇士故小

野梓氏等の創設に係り、建學の主旨は學問の獨立といふに有之候ひしも、創立者が政治家だけ學科も當初は政治經濟をのみ主として教へられし由、されば今日に於ても早稻田學派の主腦は右二科に有之候へ共、中頃坪内博士が早稻田文學の旗幟を樹てられしより、本來の特色意外の方面に發展し、霸を文壇に稱するに立至り候、現今大學部には政治經濟、法律、文學の三科有之、教科書は重に英獨佛の原書を用ひ居候、來九月よりは更に商科を開始する由、高田天野坪内の三博士主として教鞭を執られ、これに當校の卒業生が入つて墨を堅め、外にかけ持の備先生多く有之候、圖書館は毎日午前八時より午後八時まで開かれ、智識の無盡藏と可申候、先は右粗雜ながら御報知致候、偏見と誤聞とは幸に御諒察被成下度候早々不一

京だより

◎校庭の蘇鐵公、依然蕭々をまどふて雨天體操場の横

小生の如き局外漢には一向經驗無之候へば未だ存せず候。折もあらば街頭の查公に尋ねてみると存じ居り候呵々。

◎目下高等工藝學校に居られ候本校卒業生氏名は左の通りに御座候。

海保良吉。 鈴木泰造。 木村茂。

磯嶋喜六。 添田諒三。

別に本校に三年級迄在學せられたる片岡準規君も居られ候。同校内部の情况などは別に報道する事としこゝには氏名のみを以てごめ置き候。

◎第三高等學校に居られ候本校卒業生は左の諸氏に候。

第一部 原 繁造。 京藤政太郎。

多胡庄次。 廣瀬文豪。

杉本哲三。 飯田勘兵衛。

澤村專太郎。

第二部 福島郁三。

第三部 廣部智圓。

◎御地より十八里、やせや大原女の後姿は諸君に紹介するまでも無く、已に已に御存知の事あれば茲に喋々を要すまじく、氣候はと言へば御地に比して、雪は少けれど寒氣の甚だしき事は御地に較ぶ可くもあらず。比叡嵐の凜烈あるに吹雪さへ混へられて吹き立てらるゝかれば堪つたものに無之候。此頃、硯の水が凍り、手拭が凍る位は毎日の事にて、終日溶けざる事さへ有之候。鬚髯の凍るゝに至つては

大學の方に居られ候諸氏の姓名は目下調査中に有之候へば、何れ、別に悉しく申し上ぐる事と可致候。

◎高等學校に來つてより深く感じ候事は、小生の中學校にありし時、學科勉強の不足に御座候。遠慮なく申せば、本校一般にぶら／＼遊びまわるといふ氣風有之候。要するに勉強を度外視する風多くをしめ學科の中にも特に漢文や國語などには眼をかけ居らぬは何處の中學校にても同じ事と聞き居り候へ共特に本校は甚しかりしと覺え居り候。又、小生等の多くは英語に於て力の不足を感じ居り候。英語などの力は勿論、學校の先生のみに倚つて居てはつくべき物にあらず。必ずや、適當の方法を以て自ら修めざる可からず。漢文にまれ、國語にまれ、すべて、語學などは自ら修めると言ふ事は大に必要かと存じ候。

◎漢文、國語、英語などは諸君が、よしんば實業につかるゝとするも、また進んで高等の學藝を修めらるゝとするも必要欠く可からざるは茲に暇々するの要を認めず。されば、平生、大に其實力を養ひ置く

爲にタイムスを費す事のみは斷然禁止せられ度、それが爲めに小生の如きは今日大に閉口致し居り候。

後事の誠めは大に諸君の學ばれ度き事に御座候。

◎誰れにても好まぬ學科にて大に其必要を感じたるは國文法と英文法とに御座候。文法の必要ある事は已に語學の必要に於て明かにして、繰返へす必要あけれど此グラムマーの力無き事よりして、意外の失敗を買ふ事有之候。又、作文の事は已に小生が在學中屢々論せしが、當校に來つてより益々其必要を感じ候。小生の所謂作文といふは單に、文章家たる可き乃至所謂文士たる可きに要する作文にあらずして即ち、中學の學科目の一として置かれたる意味の作文に御座候。其力の不足は多くの失敗と不幸とに姿を變じて、他日諸君をして大に腦まさしむる時も可有之候。よろしく今の中に充分勉められ度候。

◎小生等の部(一部一乙)の學科目を參考の爲め申上げ置く可く候。

獨逸語 (十四時間)

通信

は治に居て亂を知るてふ寸法にては無之候哉。英語に於て特に發音に重きを置かれざりし不幸は實に回復に一大勞苦を感じ居り候。此点に於て、ベルシー氏の赴任は吾人の意を強からしむる物に有之候。

◎と申せば、或は諸君は『實力ある哉實力ある哉』と妙處に力こぶを入れて、教科書は On the 蓋的の喜劇を演ぜらるゝやも計る可からず。吾人は斷じて言はんとす、教科書すら見ざるものにして孰んぞ實力を有せんやと。然り、實力は教科書を見ざるによりて證明せらる可き者に非らずして、中學の業を終へて後一つの競争場裏に立てる時現はれ來る者に御座候。Kom ist nicht in einem Tage erhalt『羅馬は一日にして成らず』候。中學時代に充分勉強被成度候。

◎然しあがら、亦中學時代は健全ある身体をつくり出す時にして空しく下宿屋樓上に洪水に遭ひし胡瓜然たるも感服致されず候。盛んに散歩す可し。ベイスボール可也。ボート可也。テニス亦可也。唯々無

Deutsches Lesebuch.

Leitfaden.

Otto german conversation-grammar.

英語 (四時間)

Winning Out.

On Self-help and Thrift.

漢文 (四時間)

高等漢文讀本 卷之五

燕山外史

國語 (二時間)

増かゝみ

日本制度

歴史 (三時間)

東洋史

にして、甲(英法、文、其他ノ文科ニ屬スベキモノ)の組は外國語に於て差異有之候。勿論此他にも体操有之候。又、課外講義として近日より獨文學史などの講義有之筈に御座候。(勿論、特に必要の諸君に

して御質問有之候は、小生乃至當校在學の者へ御問合せ相成度候。

◎三高の通信はこゝ等に一先きり上げて高等工藝の方を次號に紹介可致候。そろゝ學年試験にて御多忙に相成べく候。御自愛專一に被成度候 勿々頓首

(二月一日こい生)

◎京都に於ける我校出身者の懇親會

洛陽三十六の高峰は夕邊の霧に匂ふて、夕陽遙かに西の彼方に沈み、餘光迷雲に映えて大都幾多の民がやがて暖かき團欒の樂しみに一日の勞苦を忘れん時頃正にこれ十月十日の夕、我校出身の諸氏相會してこゝ鴨東の樓に宴を張り、杯を擧げて以て積年の交をあたため、胸襟を開く。聊か以て本校出身者の意を強うするに足るべきもの無きに非らざる也。

來り會するもの、或は學生、或は軍人、各種の方面に身を委ぬる人々、角帽はサーベルと相互し、有髯は無髯と相隣す。しかも、其間、言ふ可からざる和氣の霽々たるものありしは何が故ぞや。金龜城頭、

十六人。

月は眠れる如き東山の頂をはあれて漸く高く、点々たるが天外の星光を仰ぎつゝ袖を分ちしは、正にこれ、輝々たる電燈の下、毛布に身を裹んで、街上に眠れる辻待の車夫が冷たき夢を三たび破られけむ時。

終りに臨んで本日幹事とあつて周旋せられたる、原、多胡兩氏の勞を謝し併せて本校出身者諸氏の健在を祈る。

(胡夷生)

金澤たより (一)

在澤 野村 雨城

紅の雲は青葉の梢と立ちかはり、五月雨の空はれやらすして小田の早苗も漸く延び、卯の花垣眞白き時節と相成申候。

われ郷關を出づるの時、奮然うたひいでたる男子立志の詩は、我が大望ある胸の中に慥かに而かも明確に刻まれ居候。

去日出澤の砌は、折しも京都本願寺新法主が加越地

通信

霞に匂ひけむ花一朵、城湊に滴らむとせし綠翠の蔭或は菊、或は雪を幾多か迎送して、移り行くある『時』は變れど、『所は湖の上、國は近江の江に近き山々の春』夏を送りたるもの、豈に『君は九州、わしや奥羽』の人々が相會せしと同一視す可けむや。然り、かゝればこの、『やアー久闊』の一語に無限の友情、謂知れぬ感慨のこもれるものありけるを。

先づ幹事原氏、發起人に代つて、起つて開會の辭を述べられ、是れより、笑聲とあり、歡語と化し、四角四面の議論よりして圓形球狀の滑稽は演ぜられ、樂しかりけむ湖畔、多くの歴史は口角をついて湧出し、拍手を以て迎へられたるは喝采を以て送られ、酒は盡くれど與ある物語は、かくて應接に遑なく起りぬ。双園堂の寄送にかゝる白牡丹は此歡を助けて更に沸々たる歡語を起さしめつ。

本日来會せられたる諸氏を擧ぐれば、河合、優美、北村、清水、久徳、小野、金田、柴田、原、多胡、福島、廣瀬(文)、廣部、杉本、添田。(不順)等の諸氏に余を加へ

方へ出張の趣にて(實は延期のところ)正田より松任に到る十數の驛々、何を申すも北國の名物とて、男といはず女といはず、老幼の信者山の如く、誠に衣香扇影織るがごとき盛觀を呈し候。

彼の室!此のクラス!と叫びつゝ、掌を合せつる里人の風情、氣の毒やら面白いやらにて、乗客みな噴飯抱腹、嗤笑千萬、一時はごよめき申候。定めし入場切符賣出しの停車場には、意外の利益不尠ことと被察候。

吾は幸に恙なく金澤に下車仕り、三構の正福寺といふに宿り申候。寺には先輩ある堀田兄を始め、不鳴雷子等同宿の事とて大に力と相成申候

本年の入學受験生總數二百四十有餘名の中、我江洲の地より飛び出でたるは、不鳴雷子、淺見子、澤子、朝日子、市川子の面々、吾を算して六名に御座候。入學試験は七月二日にはじまり、五日に了終致し候何分經驗のあき事とて心配の外無之、且つ當地は降雨多きため、散歩はおろか運動せられず、三度の食

も咽喉に迂らず、瘦せ行く身の程も相覺え申候。
儘は大膽、雨を冒して金澤の地を踏み歩きむと、案
内に堀田兄をそゝのかし、數友相携へて宿を出で、
兼六公園へ志し申候へ共、篠つく雨に弱り果て。勘
忍袋の緒も切らし、乍遺憾、同士河鼠のごとくビツ
シヨリ濡れて歸宿致し候。

何れの町屋も殺風景に、丁稚番頭の欠伸のみ響き渡
り申候。

先づ他國人の眼に止まり候ば、屋根の構造に御座候、
當地の板葺と申候ば、全く板片を用ひ、其の上には
百目位の丸石一尺置きに併列せられ。實に滑稽ある
仕組と申すべく候。

風俗習慣は別に差異之れなく、高襟も有之候へば海
老茶式部も徘徊致し居候、唯アクセントのつけ所、
奇妙にして言語不通には閉口仕り候。

市は所謂北國第一の名都、犀河は市の中都を貫き、
向山といふに對峙致し居候、前田侯百二十萬石の城
趾は方今師團の敷地に充られ、兼六公園は日本有數

近々會合の苦に御座候。

時節柄折角御自愛御勉學の程、遙かに祈上候

余り冗長に相成候へば第一回の通信、此に括筆仕候
勿々（七月六日金澤寓居南窓の破口に倚り靜軒子）

金澤だより（二）

在澤 野村 靜軒

前路、去る十日、心厚き友ごちに送られ、無恙到澤
仕候。

日々筆記におはれ、長からぬ秋の日の過ぎ行くをの
み恨み居り、兎角御無沙汰致し候。

一友より檄を飛ばし、憤慨一番、本年卒業生の經歷
を叙し、我が二中と對照して諸學校入學者の寂然た
るを、涙ながらに告げ來り申候、吾は唯吊然たるの
み御參考にて申上候、

（全文畧之）

入學學校別	滋賀縣々立	滋賀縣々立
	第一中學	第二中學
各高等學校大學豫科	五人	九人
東京高等商業學校	一人	一人

通 信

の勝地に御座候。

宏大ある建築物は、先づ師團の本營、石川縣廳、市
會議事堂、第四高等學校、醫學專門學校、師範、商
業、工藝學校、中學校、女學校、郵便電信局、警察
署、教會堂、銀行會社等、到底彥根に於ては、夢に
も見得ぬ程に御座候。

市内には中學校二棟有之候、其の程度成績は申す迄
もなく、勉勵と運動とに力を用ふるが如きは、我が
滋賀の一中に比して見たることも、弟たり難く愚考せ
られ、吾等冷汗の至りに不堪、一層の進歩願はしく
候。

加賀の國產として名だたる九谷焼は、いよ／＼旺
盛に行はれ、目下開會せる大阪博覽會にも、呼び物
の一と擧げられ、江洲の紅蕪漬、鐘詰等よりも雄勢
に御座候、未來の商業家たるもの、此際奮はすんば
近江商人の芳名も、天秤棒一本と化し去り申し候、
此段御注意を促し申候、

金澤市に於ける滋賀縣人會はます／＼盛大に趣き、

神戸高等商業學校	一人
東京外國語學校	一人
廣嶋高等師範學校	二人
金澤醫學專門學校	一人
東京高等工業學校	一人
大阪高等工業學校	三人
京都醫學學校	四人
名古屋醫學學校	一人
眞宗大學	一人
合 計	二十三人

次學年には決して、かゝることなき様心懸けられ度、
一中の恥辱を雪がんは諸子の責任かと存候。

秋冷相催し、燈火可親の候、筆硯多祥、御勉學被遊
度候。

何れ、清暇を得候へば附近の公園、名山大社、氣候
人情等、御報導仕るべく候。

先は忙しまぎれに、一筆右の如くに御座候、不一。

（九月二十二日報）

金澤たより (第三回)

野村雨城

◎北越の秋 良選法師が詠じ給ひたる、いづこも同じ秋の夕あらんがわけて北越の秋は物淋みしう思はれ候、さり乍ら尾花穂に出て秋風にあびき、鐵軌二條遠く／＼彼方に隠れ去りたる、シグナルの赤き腕白き腕の折々ガタリと下して、紅蜻蛉力なく飛びかふ静かある小春日、赤甘藷を満載したる轍の音の林のあかたにくねり行くを、越野の秋景は決して貧しからず候。

◎金澤市 北陸第一の大都とは小學地理にて習ひおぼし候事とて、はじめの者は誰しも案外の思ひ有之候、小高き兼六公園を取り圍みて蹄鉄形ををし居り候、生は東京を知らず大阪の錯綜なる、京都の基盤の目ありあるはよく知り申候、金澤市街の不規則あるさればにや車夫は一向に走り申さず候。

◎兼六公園 舊加賀侯の御屋敷跡にて、規模の宏壯あるは稀に見る所、花の時といひ紅葉の頃といひ、

殆んどあきが如く、不鳴雷子も妙技を示はすの時あ／＼閉口致し居られ候、今や落葉運動場裡を埋めては／＼／＼隈なく、日あらずして白雪を見るべく、運動の不振もまた無理なく候。

短艇加北潟へは二里、金石港へも二里、海は荒く、三冬の候は氷結致すべく、以て大方は想像せらる可候。

◎膽琵琶會 胡馬は北風に嘶き越鳥は南枝に噪ふとか申す古き語もあるごとく、誰か慈もて成れる故國を思はぬ者の有之候や、「舉頭望山月、低頭思故郷」この時此情、天涯沈淪の遊子をして、西風一夜雙鬢をして瞞盡せしめ、雁からで音に咽はしめ申候、此に巍然たる膽吹の峰、渺茫たる琵琶の湖に別れ來て同じ思ひに沈む者によりて組織せられ、年に三回又は四回相集まりて互に胸襟をひらき、肝膽を吐露し、時には狂言も演せられ候。

今左に本會々員の姓名を申上げ候。

文 學 士 橋本拾次郎君
在京都法科大學 秋吉豊二君

通信

詩人墨客の杖をひくもの多く、春の花に酔ふて九句の夢を消すあれば、秋の月に吟じて眞如法性の理を觀じ、一として詩情にかゝい吟意を養はざるは無之風流を知らぬ生等にも杖ひく毎に奥ゆかしく思はれ候。公園の唱歌中に左の如く有之候

樂翁公が兼六と、名づけられたる公園は
泉石竹樹の妙を得て、げに三園の一つあり

◎十全會 我が醫學専門學校生徒、職員及び卒業生より組織せらるるものにて、崇廣會とは大同小異に御座候、おは文藝運動の二部にわかれ、更に會誌部、演説部、剣道部、柔道部、短艇部、庭球部、野球部、ロンテニス部、弓術部に小別せられ居候、會長にはわが高安校長を推し、各部には幹部委員等ありて大に盡瘁せられ、盛大に趣き居候、本會の機關として十全會雜誌發刊せられ候も、多くは御商賣柄専門にわたり文學としては見るべきもの御座なく候。

◎運動と氣候 柔劍兩道はか／＼盛に御座候、弓術は之れに次ぐべく庭球は可なりと可申候、野球は

在東京文科大學	華房義温君
在京都法科大學	佐竹時之助君
在京都醫科大學	久徳隆篤君
在京都工科大學	岡村金藏君
醫學得業士	堀田圭三君
同	堤泰造君
在第四高等學校	藤田孝四郎君
在京都法科大學	石井光雄君
在東京醫科大學	澤靜夫君
醫學得業士	高橋半也君
在金澤醫學專門學校	伊藤禮二君
在第四高等學校一部	吉川俊男君
某縣立中學校職員	原田芳實君
在第四高等學校一部	田原正太郎君
同	華房敏麿君
同	野間庄次郎君
同	岡田信君
在陸軍士官學校	奥村金一郎君

同

木村 静一君

在 金澤醫學專門學校

北川 光雄君

同

阿原 信次君

同

近角 常音君

同

今村 文碩君

同

朝日 昊君

同

市川 久多君

同

桑原 益方君

同

野村 義雄君

◎卒業生と宴會 堀田圭三、堤泰造両君には、螢雪

の苦を積んで目出たく業を卒へられ、いづれも錦の衣を故郷に飾られ申候、両君の雀悦は更かり生等に於ても先輩諸子の美舉とて、欣喜の至に堪えず候。

例によりて去る六日、祝賀に送別をかねて公園内米永亭といふに宴をひらき申候、當日は金澤に稀ある秋日和と當番幹事が勞により盛大に御座候ひき、會の順序は先づ幹事の挨拶、次に來賓新醫學得業士君の謝辞、終つて無禮講に移り、吟詩より劍舞に、歌

ふやら踊るやら、跳ねるやら、賓主一同十二分の興をつくして相散じ申候。

桔梗凋み萩散り、菊もうつろひ日増しに寒冷をおぼへ候折柄、健全ある半千の諸子よ、御自愛御勉強の程、遙かに國の爲め祈上候。(三十六年十一月十五日)

金澤たより(第四回)

野村 雨城

改まりぬる年の始めの御壽、幾千代かけて何方もおなじ御事に目出度申納候

◎金澤の新年 流るゝ水と過ぎゆく月日は瞬くひまも小止みなく、東亞の風雲いどゞしく暗澹たる中に三十六年も過去のものとして葬られ候。思へば月日の經つばかり早きものはなく、昔の人の云ひ古せる矢よりも疾く、腕車より汽車、鐵馬より電車、飛脚より郵便、郵便より電信、電信より電話と何事も早きを尊ばるゝ當時とありては、月日の歩みも一入の速度を増せるかの思ひ有之候。

万里同風とは申し乍ら、とりわきて本年は當地も雪

あきものから、絡繹として織るがごとき年賀の客は金光燦然たる軍服にあらざれば瀟洒たるフロツクコートからぬはかく、燕尾服は少なければ羽織袴の嚴めしきが多く、人車は走り肥馬は嘶き、徒歩は蹣跚として顔の赤からざるは無之、家々にありては初鶏の聲に疾く起きて若水をくみ、身を清くして帝都を遙拜し、斯くて一家は團欒して屠蘇の酒を酌み、雑糞の餅を祝ひたることにて、老ひたる若き男女の別なく己がじと遊び戯れ、或は遣羽子に或は歌かるたに或は風箏に壽娛六に心々の好き嫌ひ、遊びは異なるあるも皆共に歡呼の聲には異なるなく、料亭をはじめ遊廓とも音締め妙ある三絃、小鼓の音も冴えて聞え、初芝居や各寄席の興行物も何れ劣らぬ景氣を競ふて日ねもす夜もすがらのざんざめき、見るとして聞くとして芽出たきものゝ數からぬは御座なく候。

◎新年宴會 例年の例により、昨二十九日午後二時を期し、米永亭に於て祝賀會を催ふし候、出席者は奥村君をはじめ第四高校にては藤田君、吉川君、田原

君、醫專校にては伊藤君、北川君、阿原君、今村君、朝日君、市川君、桑原君と生とを合せて十二人に有之候、一人來りまた到り快談壯語に餘念なきうち、やがて定刻とあるに及び會場にいたり候へば、こゝには松竹梅をいけ、卓をつらねて準備周到を極め居り候、一同席につくや幹事は立つて開會の辭を述べられ、つゞいて祝盃舉げ候、余興としては吉川君の淨瑠璃、阿原君の今様、奥村君の軍歌、北川君田原君對生の歌がるたは當日の呼び物にて御座候ひき、一同臉邊紅を呈し、萬歳を三呼して歸途につく折も折とて、二十日頃の月かげに誰か吹くらんいみじゆ調べたる笛の音、そゝろに心を動かされて切に郷里を思ひいだされ申候。

◎北陸文學 文學としては別に見るべきもの無之候先に新天地てふ雜誌出でゝ北國青年の弊習を打破せんとせしも、濛々たる陰風の爲めに衆寡敵せず、一敗地に塗ち餘勢あるかあきかの有様に御座候、後に北國文壇といふが現はれ、旭日の勢もて金城の下を

風靡せんとせしも、これ亦號を重ぬる數冊、つひに其の後を認め申さず、今や誰あつて文誌の新刊を希ひ、再び文壇の上に腕を揮はんと欲する者の候はんや。文學士藤井紫影と申す人、目下ヤツキとありて同士を募り、北聲會あるものを起し、微々たる北國文學を振はしめんと由に御座候、「北日本人」「新青年」「北國新聞」「政教新聞」等當市に發刊せられ候も、とりて論する程に無之候、併し謠曲、琴絃の道に到りては隨分流行致し居候。

◎新春餘韻 相も變はらず好きの道とて遠ざかり難く、學びの道のひまゝに、咬り出したる蜂腰二三首御目にかけ候。

謹みて祝ふとばかり歌もあく亞米利加よりの友のゑはがき

母の脊にありし昔ぞしのばるゝ猿曳のうた萬歳の

ころゑ

あはれこの幸あれ子よと花賣によせし同情のいつ戀とありし

雜報

○日誌摘要

七月五日 劍柔兩道大會
七月十五日 第一學期試驗開始
七月廿一日 第一學期終業式舉行、夏期休業始まる
八月四日 武德會大會、撰手出演
九月廿一日 校庭草取り開始
九月廿二日 招魂社參拜
十月十日 終日遠足
十月十六日 端艇競漕會
十一月一日 三高野球大會、撰手出演
十一月三日 拜賀式舉行、陸上運動會舉行
十一月四日 向一週間修學旅行
十二月六日 劍柔兩道小會
十二月十五日 第二學期試驗開始
十二月廿一日 第二學期終業式舉行、冬期休業始
一月一日 拜賀式舉行
一月八日 第三學期始業式
一月九日 雪中行軍

かりの宿の日影つめたき紅梅にあかぬ鶯枝うつりする

日もすがらおどりつかれて猿曳のそびらにねむる

猿の子あはれ

ゆきくれし野守の庵に雪ふりてうらの笹はら夷さまよふ

あすよりはあひがたき妹の手とりつゝかるたとり

つゝ夜をふかしける

かたむきし藁ぶきの家をうるはしくさきかざりたる紅梅の花

先は右下らぬ事のみ書きつゝけ、汗顔の至りに御座候、今後は風俗習慣、地理歴史など御報申し上ぐべく、第四回のたより目出たく此に筆を括き申候（一月孝明天皇祭日）

月孝明天皇祭日）



◎西村醉處先生 公明正大の論、雄姿奔放の辯、

盛に小楠公を論じて熱淚潜々、轉た吾人をして冷汗

止ざらしめられしは、去る明治卅四年五月の事にし

て、吾人が始めて先生にまみえしの時あり、當時吾

人は、先生の堂々たる風采德望、恰も秋風原頭、泰

山を望むが如きを、敬慕して止まざりき、爾來先生

は大阪に在りて、彼の大築港の所長として、彼地に

在留せられしかば、吾人は久しく先生の聲咳に接す

るを得ず、深く遺憾とせし、たゞ偏に先生の健在を

祈りしに、今回計らず腦病にかゝられ、遂に業中途

にして、職を辭して、故山に歸臥せらるゝ事とあり

ぬ、嗚呼先生の遺憾如何ありしぞ、唯だ吾人は先生

の一日も早く壯健に復せられむ事を、偏に神明に祈

るのみ。

因に記す、去る五月の舊節句に際し、先生は生徒一

同に柏餅を分配せられぬ、吾人は先生の此の賜に對

し、深く拜謝し、且つ先生の意を用ひらるゝの厚き

に深き感謝の辭を捧ぐにあむ。